



高等学校

授業評価ガイドライン

～さらなる授業改善に向けて～

大阪府教育委員会

目 次

I	はじめに	1
II	授業評価について	2
III	授業評価システムの構築	3
	1 取組みを進める校内体制づくり	3
	2 全教員の共通理解と設定目標の共有	5
	3 年間評価計画の策定	7
IV	授業評価の取組み	9
	1 授業者による自己評価の実施	10
	2 生徒による授業評価の実施	11
	(1) 生徒による授業評価の必要性	11
	(2) 生徒による授業評価の信頼性	11
	(3) 具体的な実施上の検討事項	12
	(4) 授業評価結果の集計と分析	17
	(5) 評価結果の課題分析と改善方策の検討	18
	3 研究授業における授業評価の実施	19
	4 公開授業における授業評価の実施	20
V	授業評価結果の有効な活用	22
	(1) 授業評価結果及び分析結果の公表	22
	(2) 授業改善につなげるための取組み	22
VI	「授業評価」実施に関するQ&A	23
VII	おわりに	25
	参考・引用文献	26

I はじめに

生徒に基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させるとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うためには、生徒にとって「魅力的な授業」「わかる授業」が日々行われることが重要であり、そのため教員自らが授業改善に取り組むことが求められている。

授業改善には、教員自らが自分の授業を振り返り、自らの課題について分析することが不可欠であるが、さらに、生徒、同僚教員、保護者などによる授業評価を行い、多様な観点から授業を検証し、その成果や課題を共有しながら学校全体で組織的に取組みを進めることが重要となる。

大阪府教育委員会では、授業評価の取組みの推進をめざし、平成 16, 17 年度の 2 年間、「授業評価システム」推進事業を実施した。府内の小学校、中学校、高等学校あわせて 33 校を研究推進校に指定し、授業評価の方法、評価結果の分析、分析結果に基づく指導方法改善の在り方や指導計画の在り方等について実践研究を行った。

各指定校が、学校や生徒の現状を踏まえた独自の授業評価システムの構築に取り組み、「板書の仕方や声の大きさを意識する教員が増えた」、「全教員による取組みの成果として学校全体の課題である『授業規律』が確立された」、「生徒の授業満足度が向上した」などの成果が報告された。さらに、「評価を行うことで、生徒の授業への関心意欲が高まり積極的に授業に取り組むようになった」、「教員に『授業を変えよう』とする授業改善の意識が現れてきた」など、授業評価の実施が教員や生徒の授業に対する意識の高揚や意欲の向上につながることも報告された。

各指定校から提出された「最終報告書」は、「授業評価システム」活用の手引きとして、報告集「よりよい授業をつくるために」として取りまとめるとともに、Web ページにも公開した。また、平成 18 年度には「学校運営改善のための学校評価に係る実践報告会」を開催するなど、府教育委員会として事業の研究成果の取りまとめ及びその普及を図ってきたところである。

事業における研究成果を踏まえ、生徒による授業評価のほか、研究授業や授業公開を実施し教員相互評価などを行う学校が増えてきているが、「大阪の教育力」向上プランに示した、平成 22 年度からの全府立学校への授業評価導入に向け、各学校がより一層、学校として組織的に授業評価に取り組むための指針として、本ガイドラインを作成したものである。

各学校においては、本ガイドラインを参考として授業評価の取組みを推進し充実させることで、生徒にとってより「魅力的な授業」「わかる授業」を実現するとともに、府民から信頼される魅力ある学校づくりにも役立てていただきたい。

大阪府教育委員会 高等学校課

II 授業評価について

授業評価とは、授業の質の向上により、生徒にとって「魅力的な授業」「わかる授業」を実現することを目的として、多様な観点から授業を検証する取組みである。

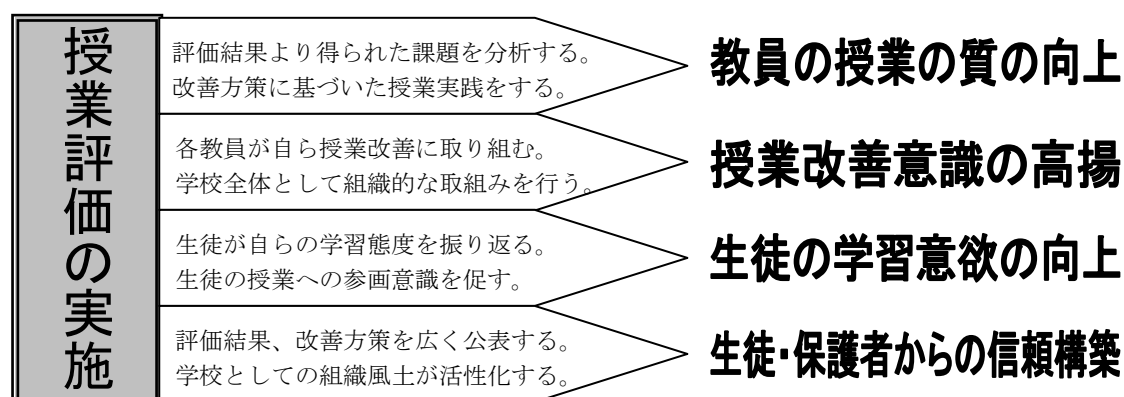
評価者としては授業者（教員）、学習者（生徒）、観察者（同僚教員・保護者・学識者など）が、評価対象としては授業者、学習者、学習集団などが考えられる。

授業は、学校の教育活動の中心となるものである。生徒は学校生活の大半を授業で過ごす。生徒にとって「魅力的な授業」「わかる授業」に多く触れる時、生徒の学校生活も充実したものとなっている。「魅力的な授業」「わかる授業」を実現するためには、まずは、授業者である教員自身がめざすべき授業とは何かを考えつつ、日々授業改善に取り組む必要がある。しかし一方で、授業そのものが、教材研究から授業展開に至るまで、授業者の主観的要素に負うところがきわめて大きいことを考慮すれば、授業者の視点だけでなく、時には、他者からの客観的な視点を取り入れながら、授業を検証することも授業改善には必要である。

授業は、授業者と生徒との相互交流によって成り立っている。そのため、生徒側の視点、すなわち、生徒が授業にどのような印象を持ったのかを把握し、生徒にとって魅力的な授業になったかどうかを検証することが不可欠である。そして、さらに多様な観点から授業を検証するためには、同僚教員・保護者・学識者などが授業を評価する機会を積極的に取り入れることも重要である。

このように、授業評価とは、多様な視点を取り入れながら、さまざまな側面から授業を浮き彫りにする一連の取組みである。授業評価の実施により期待できる効果は以下のとおりである。

【授業評価の実施により期待される効果】



Ⅲ 授業評価システムの構築

授業評価システムとは、授業評価の目標設定、具体的な評価手法、評価結果を活用した改善方策の策定など、各学校における目標設定から授業改善までのP D C Aサイクルに位置づけた一連の取組み全体をさす。

教員が独自に授業アンケートをとるなど、生徒による授業評価がすでに行われているケースがあるが、その成果は、その教員だけ、あるいは、ごく限られたものになりがちである。

ここでは、授業改善を一層進めるために、学校として組織的に授業評価に取り組み、その成果や課題を教科や学校全体で共有することをめざしている。

学校として組織的に取り組むための授業評価システムを構築するためには、以下の点について検討しなければならない。

1 取組みを進める校内体制づくり

学校として組織的に授業評価を行うには、目標の設定・評価手法・成果や課題の分析方法・効果的な公表方法・授業改善につなげる方策などの検討や、年間評価計画の立案のほか、全教員に対する周知・連絡・調整など、以下に示すとおり、多くの業務が必要となる。したがって、それらの業務に主体的に取り組む校内体制づくりが不可欠となる。

- (1) 授業評価が何をめざすのか、どのように活用するのかなどについて、全教員の共通理解を図るとともに、生徒・保護者等に周知する。
- (2) 全教員に対して、学校として育てたい生徒像、めざすべき授業、授業改善の目標などについて共有を図るとともに、基本的な方針について共通理解を図る。
- (3) 評価結果をどのように活用し授業改善につなげるかということを含め、授業評価から授業改善への流れを明確にするためのP D C Aサイクルに位置づけた年間評価計画を立てる。

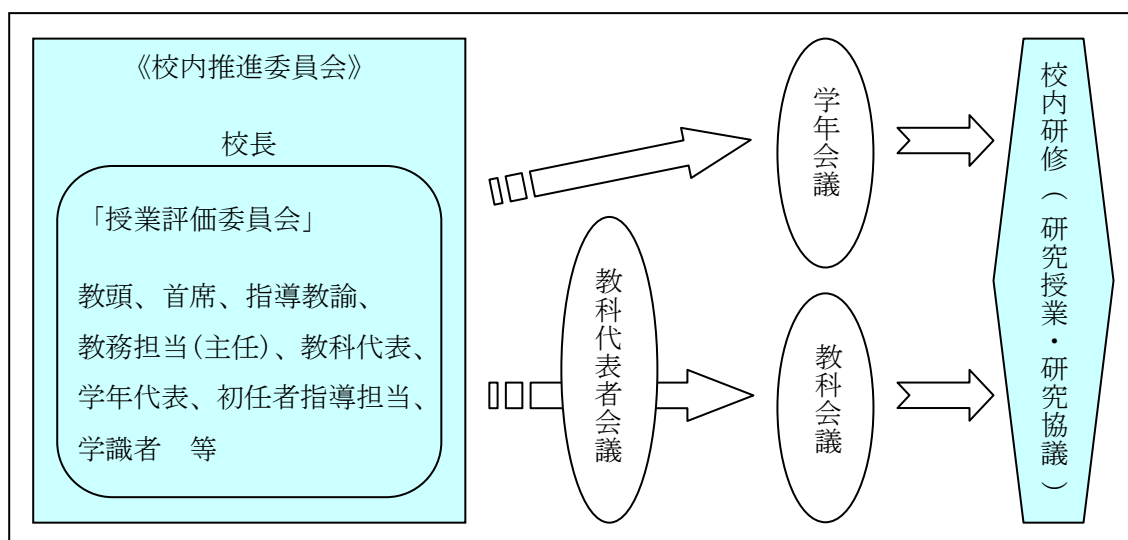
なお、年間評価計画の策定にあたり、以下のような検討が必要となる。

- (4) いつ、どのような実施形態で、どのような評価規準表を用いて授業評価を実施するのが効果的であるかについて検討する。また、研究授業・研究協議や公開授業の計画的な実施についてもあわせて検討する。
- (5) 授業アンケートの集計・分析方法、効率的に集計するための方策について検討する。
- (6) 全教員が評価結果及び分析結果を共有し、改善方策を検討するための教科会議や校内研修などの実施について検討する。
- (7) 評価結果、分析結果及び課題に対する改善方策などを、生徒や保護者に効果的に公表するための方策を検討する。
- (8) 授業評価を継続して実施するための工夫と、授業評価を実施することが生徒の学習意欲や学力の向上につながっているかどうかを検証する。

【校内体制づくりにおける考え方】

- ・ 授業改善を各教員個人に任せるのではなく、教員同士のネットワークの中で評価結果を共有しつつ、授業について考え合う場を作り出すことが大切である。
- ・ 教員一人ひとりが授業改善に意欲的に取り組めるよう、信頼される組織づくりをめざす。
- ・ 例えば、「授業評価委員会」（仮称）を校内に新たに設置し、年間評価計画の作成、公開授業や研究授業と評価、校内研修等と連動させた授業改善に向けた研究体制の構築を行う。
- ・ 「授業評価委員会」（仮称）には、各校の実情に合わせて、教務部や運営委員会等、既存の校内組織を充てることも可能である。
- ・ 「授業評価委員会」（仮称）は、以下に示すとおり、教科会議や学年会議等とも連携し、研究授業を実施して研究協議するという研修スタイルなどを確立することも必要である。

【授業評価委員会と校内体制（参考例）】



【授業評価委員会（仮称）の具体的な業務と本ガイドラインでの参照ページ】

- 生徒・保護者に対する周知 ⇒ P. 11, 22
- 全教員による授業評価実施の趣旨の共通理解・改善目標などの共有 ⇒ P. 5
- 年間評価計画の策定 ⇒ P. 7, 8
- 生徒による授業評価の実施計画 ⇒ P. 7, 8, 11, 12, 13
- 研究授業の実施計画 ⇒ P. 7, 8, 19
- 公開授業の実施計画 ⇒ P. 7, 8, 20
- 授業評価規準表の作成 ⇒ P. 12, 13, 14, 15, 16, 20, 21
- 評価結果の集計・分析 ⇒ P. 17, 18
- 教科会議や校内研修の設定 ⇒ P. 4, 5, 22
- 評価結果の公表方法の決定 ⇒ P. 7, 22
- 各教員に対する授業改善のサポート ⇒ P. 22, 25

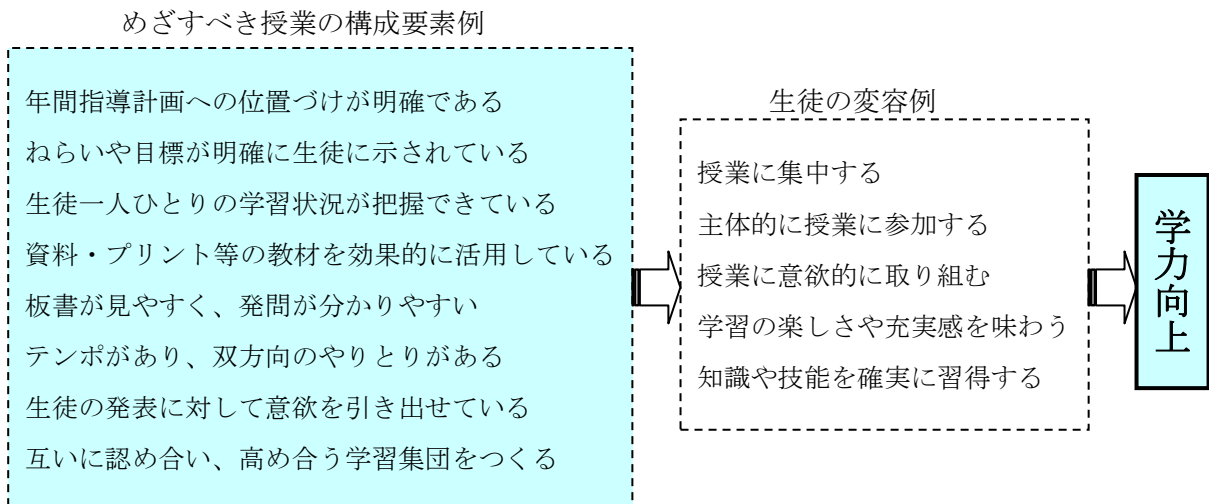
2 全教員の共通理解と設定目標の共有

授業評価を進めるにあたり、職員会議や校内研修を通して授業評価の意義や実施の趣旨について説明し、全教員が授業改善に積極的に取り組むようにしなければならない。

また、前年度の学校教育自己診断結果や定期考査の結果などにより、生徒の学力の実態や授業の現状を把握・分析し、授業における課題を明確にする必要がある。その上で、明らかになった課題や「育てたい生徒像」を踏まえ、めざすべき授業を明確にするとともに、授業改善や教員の授業力の目標などを設定する。また、授業評価を実施するにあたっては、評価する観点について、評価軸を設定しなければならない。

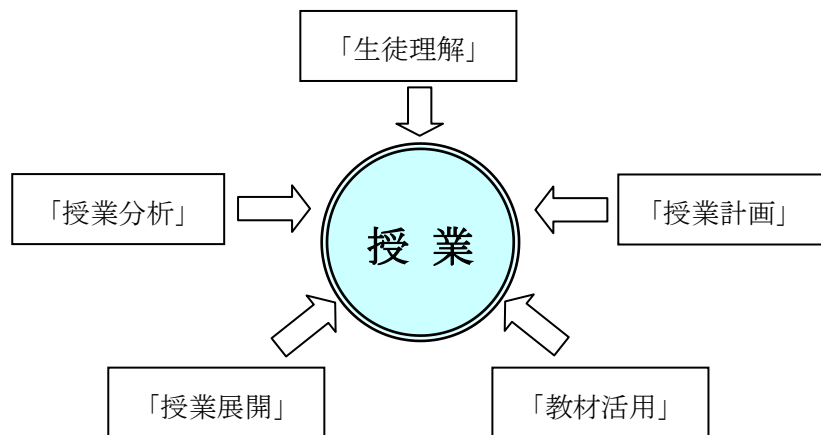
なお、すべての教員が課題や目標を共通理解し共有することが重要である。

【めざすべき授業例】



【授業評価軸の設定例】

例えば、授業の構成要素として、「生徒理解」「授業計画」「教材活用」「授業展開」「授業分析」の5つの評価軸を設定する。



【授業評価軸とその具体的な内容例】

評価軸例	具体的な内容例
「生徒理解」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の学習意欲や学習状況などを客観的に把握する。 ・ 生徒の理解度を的確に把握し、個に応じた指導を展開する。 ・ 生徒のよさを称揚するなどにより、学習意欲を喚起する。 ・ 互いに認め合い高め合うための学習集団づくりに努める。
「授業計画」	<ul style="list-style-type: none"> ・ ねらいに基づいた単元計画を立てる。 ・ 各単元や授業における学習目標を生徒に明確にする。 ・ 学習目標達成に向け、学習過程や学習形態などを工夫する。 ・ 指導計画に即した評価規準・評価方法などの工夫をする。
「教材活用」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒の学習意欲を引き出すための教材の工夫・開発をする。 ・ ねらいに合った教材や教具を選択し、有効に活用する。 ・ 教材に対する深い理解と専門的知識をもつ。
「授業展開」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒を引きつけるための効果的な発問をする。 ・ 大きくていねいな字で、内容も整理した板書をする。 ・ 生徒の状況に対応した適切な指示、分かりやすい説明を行う。 ・ 学習意欲・学習態度を育成するための規律ある授業を展開する。
「授業分析」	<ul style="list-style-type: none"> ・ 生徒と本気で向き合う姿勢と教育に対する熱意・使命感をもつ。 ・ 指導計画に対する授業の振り返りを行い、課題を見つける。 ・ 生徒の学習成果の客観的な分析・評価を行う。 ・ 授業力の向上と授業改善をめざす向上心をもつ。

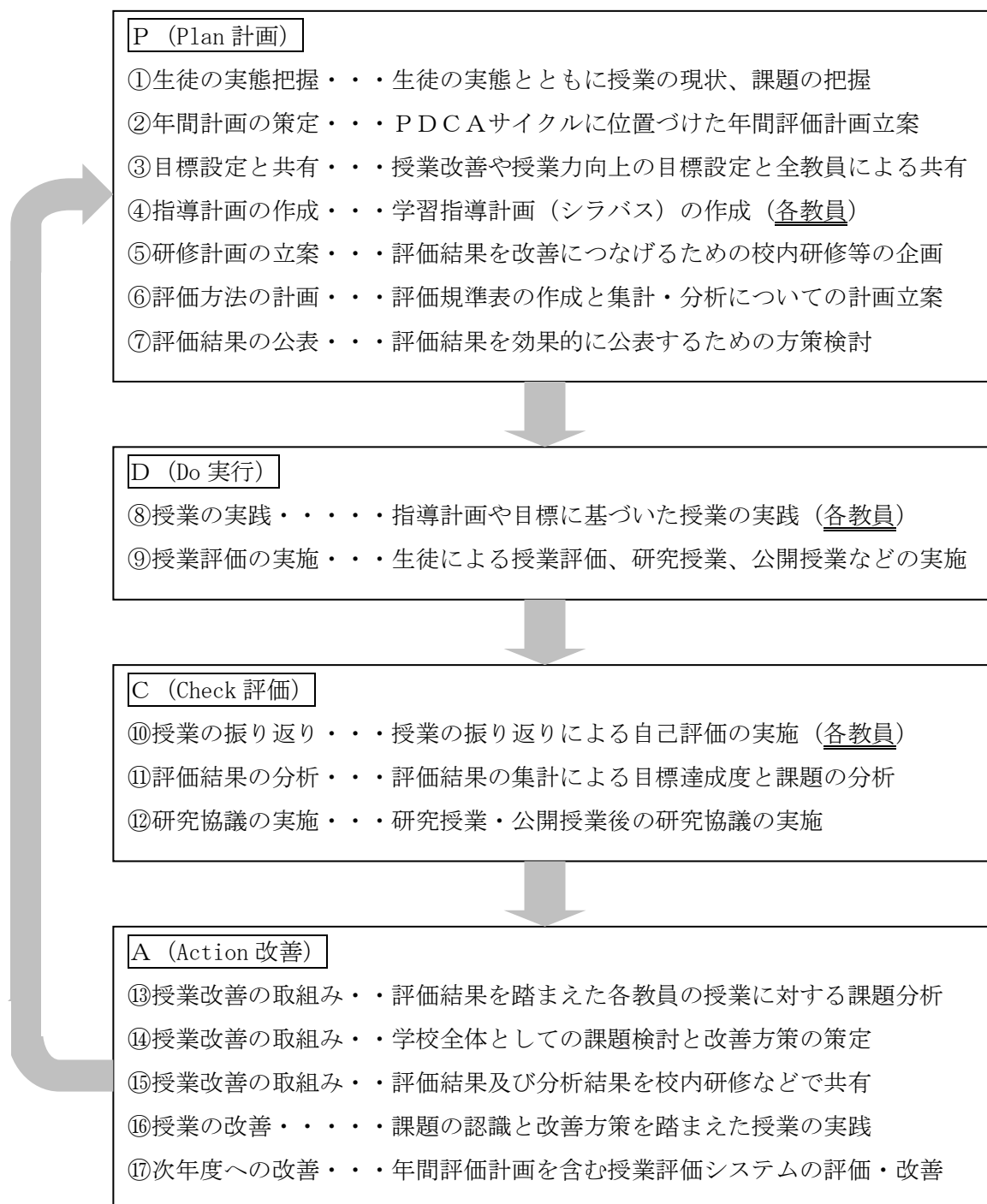
授業はこれらの構成要素からなると考えられるが、授業評価規準表の作成にあたっては、各学校において、いくつかの要素に焦点化することも可能である。



3 年間評価計画の策定

授業評価の実施時期については、学校により、さまざまな時期が考えられるが、どの時期にどのような方法で実施すれば最も効果的であるかを十分に検討し、各学校で適切に決定することが重要である。

なお、授業改善を進めるためには、しっかりとした見通しを立てた取組みが必要である。そのためには、目標設定から授業評価実施、そして授業改善までの流れを明確にしたP D C Aサイクルに位置づけた年間評価計画を立てる必要がある。



【年間評価計画の策定例】 （丸番号は P. 7 の番号を示す）

生徒による授業アンケートを年 1 回実施する場合

	P (Plan 計画)	D (Do 実行)	C (Check 評価)	A (Action 改善)
4 月	①②③④⑤			
5 月				
6 月		⑨公開授業		⑬⑯
7 月	⑥⑦			
8 月				
9 月				
10 月		⑨研究授業	⑫研究協議	⑬⑯
11 月		⑨授業アンケート		
12 月			⑪結果分析	⑬⑭⑮
1 月				⑰
2 月				
3 月	①②③④⑤			⑰

生徒による授業アンケートを年 2 回実施する場合

	P (Plan 計画)	D (Do 実行)	C (Check 評価)	A (Action 改善)
3 月	①②③④⑤			
4 月				
5 月	⑥⑦	⑨研究授業	⑫研究協議	⑬⑯
6 月		⑨公開授業		⑬⑯
7 月		⑨授業アンケート		
8 月			⑪結果分析	⑬⑭⑮
9 月				⑰
10 月		⑨研究授業	⑫研究協議	⑬⑯
11 月	⑥⑦			
12 月				
1 月		⑨授業アンケート		
2 月			⑪結果分析	⑬⑭⑮
3 月	①②③④⑤			⑰

その他

- ・ ⑧授業の実践、⑩授業の振り返り、⑯授業の改善については、毎時間行うものとする。
- ・ 評価結果などを踏まえ、随時、指導計画を見直すことも必要である。
- ・ 同僚教員が相互に授業を見せ合う「授業公開」の実施（期間）についても検討する。

IV 授業評価の取組み

授業者（本人）、学習者（生徒）、観察者（同僚・学識者・保護者など）など多様な視点を取り入れ、さまざまな側面から授業評価を行い、授業改善を図ることが大切である。

1 授業者による自己評価

授業者本人が授業を振り返り、改善すべき課題について検討する。なお、自己評価シート（次ページ参照）を作成し活用することは、評価の視点を明確にするという点において有効である。

2 生徒による授業評価

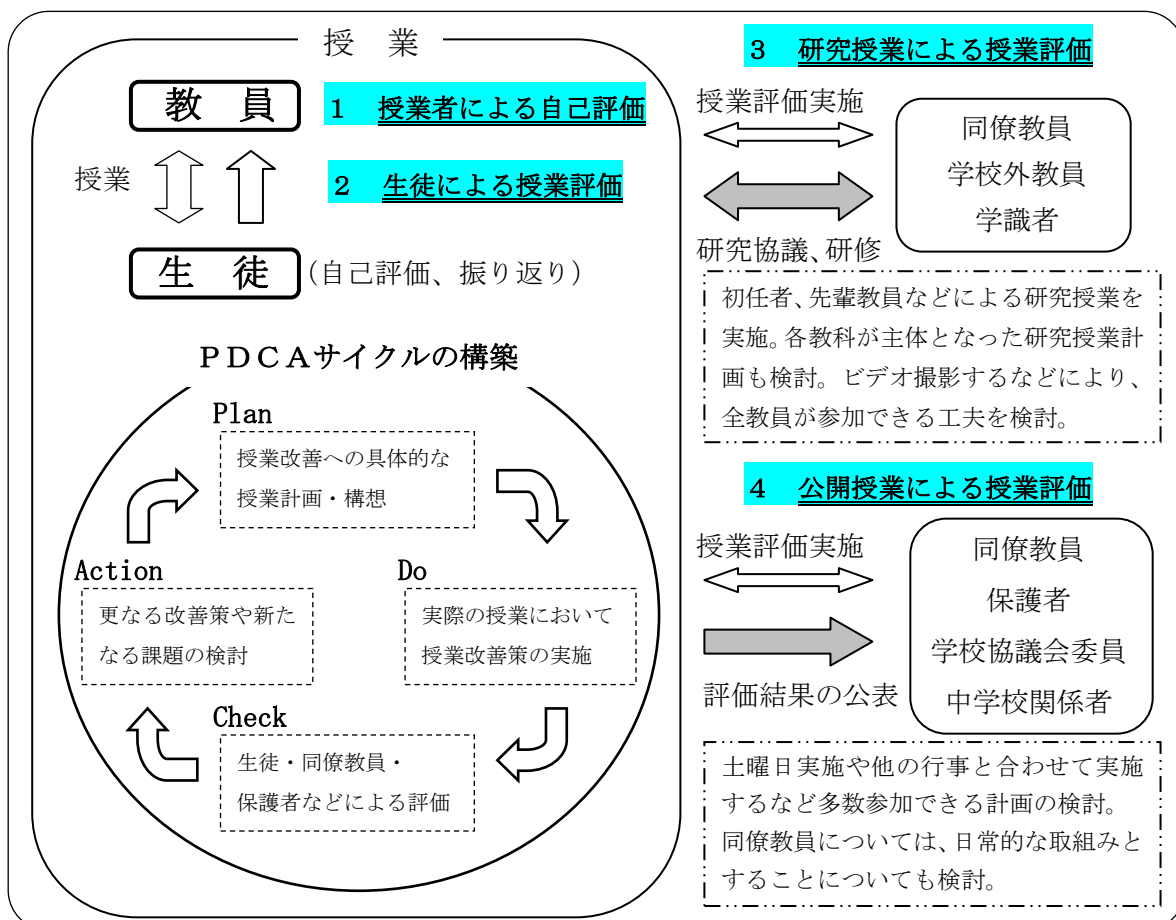
授業内容や授業の進め方などについて、生徒の意見や要望を聞くことにより、教員が自らの授業を効果的に測定することができる。

3 研究授業における授業評価

同僚教員のほか、他の学校の教員や学識者を含めた研究授業・研究協議を実施し、授業についての意見交換を行うことで、自らの授業を客観的に評価するとともに、授業の課題や改善方策などを共有することができる。

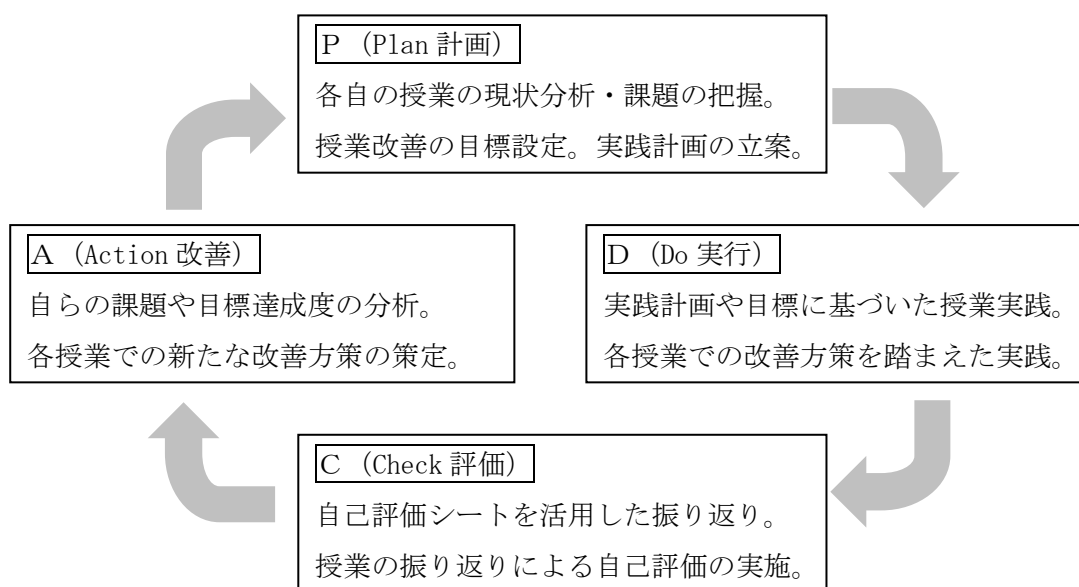
4 公開授業における授業評価

保護者などに授業を公開することで、学習集団に対する評価などを含め、より多くの視点から授業評価を受けることができる。



1 授業者による自己評価の実施

授業を改善するためには、授業者本人が、授業改善に向けた強い意識を持つとともに、取り組むべき課題とめざすべき目標を踏まえた実践計画を立て、その計画に基づいた毎時間の授業実践を通して、自らの授業を振り返り、自らの課題を分析し、改善の方策を検討するといったPDCAサイクルに位置づけられた取組みを実践しなければならない。



【自己評価シート例】

評価軸	番	評価項目
生徒理解	1	生徒の実態を把握し、授業の難易度や進度は臨機応変に対応している。
	2	机間巡視をするなど、生徒の理解度や学習意欲を把握しようとしている。
	3	生徒一人ひとりの学習の成果やつまづきに気づき、対応している。
授業計画	4	毎回授業のはじめに、授業の目標やねらいを明確にしている。
	5	グループ学習、個別学習など、授業内容により学習形態を工夫している。
	6	生徒に評価方法を示すとともに、生徒の様々な面を適切に評価している。
教材活用	7	生徒の理解に役立つプリントや補助教材の作成に努めている。
	8	教科書・資料・プリント等、教材を効果的に活用している。
	9	授業で使用する教材や扱う分野について深く理解している。
授業展開	10	大きな声で生徒に分かりやすいことばを使って授業を行っている。
	11	板書は大きくていねいで、生徒に分かりやすい内容となるよう心がけている。
	12	常に規律のある授業をこころがけ、的確に指導している。
授業分析	13	生徒にとって魅力ある授業をしようという、熱意や意欲をもっている。
	14	常に教材研究に努め、授業力の向上をめざしている。
	15	授業の振り返りを行い、自らの課題を分析し、授業改善に努めている。

2 生徒による授業評価の実施

(1) 生徒による授業評価の必要性

授業改善の取組みには、授業内容の難易や授業の進度、教材の活用方法のほか、生徒の授業への取り組み姿勢や学習内容の理解度、学習環境など多くの要素が関わっており、これらの中には、授業を受ける側の生徒でないと気づかないことも多くある。したがって、授業を改善するには、教員が生徒の視点を知ることによって、自らの授業を振り返り改善のためのヒントを得ることは不可欠である。

また、生徒による授業評価は、生徒自身の授業への取組みに関する自己評価になるとともに、授業への参画意識を促し、主体的に授業に取り組もうとする姿勢が生まれ、学習意欲を高めることも期待できる。

さらに、生徒による授業評価は、教員と生徒の「コミュニケーションツール」として機能し、パートナーシップを生み出すことが期待される。評価結果を生徒と共有し、授業の実態を互いに確認することで、教員と生徒とのめざすべき授業に対する考え方の違いを見出すことが可能になる。また、教員だけではなく生徒もまた授業の当事者であるため、めざすべき授業を実現するには相互に理解しあうことが不可欠となる。

教員が授業を改善していくことと、生徒が学習スタイルを改善していくこととは、車の両輪として連動して進まなければならないものであり、双方の努力が、授業評価のコミュニケーション機会を通して、日常の活動に浸透していくことが最も重要である。

(2) 生徒による授業評価の信頼性

生徒による授業評価を実施するにあたっては、その目的が、教員の人物や人格を評価することではなく、「授業の質を向上させる」ことであるということが、教員と生徒の双方において共有されていることが重要となる。

なお、生徒に正しい理解を求めるために、評価結果をどのように活用するのかといったデータの利用方法や、評価を行うことが生徒の不利益になるものではないことなどについて事前に伝えるとともに、評価方法についての適切な指導を通して、生徒の評価能力の向上を図ることも必要となる。

生徒が、授業評価を実施する目的などを正しく理解することで、より責任をもって授業評価に取り組むことができるようになり、評価の信頼性を高めることができる。生徒にとって、しっかりと回答することが意義あることだと認識されれば、より信頼性の高い回答を期待することができるようになる。

大切なことは、教員が評価結果を踏まえ授業を改善しようという姿勢や熱意を強く持つことであり、そうすることで、教員に対する生徒の信頼感が増し、自ずと評価の信頼性と有用性が向上していくのである。

(3) 具体的な実施上の検討事項

生徒による授業評価を実施するにあたっては、授業力の向上を目的として行うものであることを踏まえ、以下の事項について、校内での十分な議論を重ねて決定することが必要である。

ア 実施時期

実施時期については、各学校が学校教育計画、年間指導計画などを踏まえ、年間評価計画のもとに適切に設定することが望ましい。

具体的には、評価結果の集計と課題の分析を行った上で、校内研修などにおいて、改善方策についての検討を行うことができる期間、また、評価結果などを生徒にフィードバックするとともに、その改善方策を踏まえた授業を実践する期間を考慮に入れて、実施時期を定めることが必要となる。

イ 実施回数

授業を評価する際に重要なことは、めざす学習が成立したかどうかを検証することである。したがって、授業評価において明確になった課題が、それ以降の授業において改善されているかどうかを、実践の期間において生徒に再度確認するという目的で、可能であれば、年2回の実施を計画することが望ましい。

ウ 実施形態

実施形態については、授業者本人が個別の授業で実施するほか、担任がLHRなどの時間にまとめて全教科・科目について実施することも可能である。

なお、実施形態により、授業評価規準表(P.14～P.16参照)の様式も異なるため、実施時期や回数とあわせて計画段階で十分に検討しておく必要がある。

エ 授業評価規準表の作成

授業評価規準表の作成にあたっては、各学校の生徒の実態及び教科・科目の特性に応じた評価項目を設定すべきである。そのためにはまず、各学校において生徒や授業の現状を踏まえた評価の観点を定め、その観点に基づいて具体的な評価項目を設定することが望ましい。

なお、授業評価規準表の作成にあたっては、以下の点に留意しなければならない。

➤ 評価の観点を定める

評価の観点の決定に際しては、授業の現状における課題と授業改善の目標に応じ、授業評価からどのようなことを導き出したいかを十分に検討することが大切である。

評価の観点には、教員の話し方、授業の進め方、教員の授業への態度、生徒の授業への関与、生徒の教員への態度、生徒への配慮、生徒の負担感、教材の利用、評価の仕方、授業への満足度、授業の理解度、授業の環境といったものが想定される。

➤ 評価項目を設定する

評価項目については、どの教科・科目にも共通の評価が可能なもの、教科・科目の特性によって異なった評価項目の設定が必要となるものがあると考えられる。また、

授業者本人が特に焦点化して聞きたいケースも想定されるため、全教科・科目に共通の項目に加え、教科・科目や授業者が、必要に応じて、項目を追加できるような工夫が必要となる。

また、生徒自身の自己評価に関する項目を入れることも、自分自身の学習態度を振り返らせることができる点で有効である。

➤ 評価指標を設定する

評価指標を数値評価とする場合の段階数については、データの尺度水準という観点から4段階以上が必要であり、通常、4段階か5段階が利用される。両者の違いは「ふつう」や「どちらでもない」を含めるかどうかであるが、授業アンケートの場合、プラスの評価とマイナスの評価に2分して集計することが一般的であるため、4段階を採用するケースが多い。一方で、プラス・マイナスの判断を求めることになるため、判断を決めかねている生徒についての誤差がでるという欠点も考えられる。

➤ 効率的な集計に向けた様式の工夫など

校内で共通様式を作成するなど、汎用性に留意するとともに、マークシートを導入するなど、効率的な集計ができるような工夫も必要となる。また、評価項目の数についても、集計・分析の手間を考慮し、過度に多くならないよう、また、経年変化や学年ごとの差異の分析等の必要性にも留意しつつ、必要な項目の精選に努める必要がある。

➤ 評価項目の内容について

- ・すぐに改善可能な教員の姿勢や技術面についての内容を多く取り入れる。
- ・生徒が評価しやすいよう、具体的でわかりやすい表現を用いる。
- ・「授業は分かりやすく楽しい」など、2つ以上の内容や要素を含む質問にならないよう留意する。
- ・授業者である教員の人物評価にならないよう配慮する。

➤ 自由記述欄の設定について

自由記述欄については、学習者としての生徒の具体的な意見が必要な場合に設けることが有効である。具体的には、「授業で肯定的に評価できる点」「授業で改善すべきだと思う点」の2項目に分けて聞くことが多い。

➤ 記名式か無記名式かについて

生徒の記名・無記名については、それぞれの効果を考慮し、学校で適切に決定すべきである。

【生徒による授業評価規準表例（講義形式）】

次に示す授業評価規準表は、授業者本人が個別の授業の中で実施する形態を想定し、講義形式の共通項目の参考例として作成したものである。これらの項目に教科・科目や授業者による独自の評価項目を追加することが可能である。

■自己評価項目（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

番	評価項目	評価			
1	家庭でも予習や復習の時間をとっている。	4	3	2	1
2	授業中は集中して先生の話聞き、学習に取り組んでいる。	4	3	2	1
3	クラス全体が授業に対して前向きに取り組んでいる。	4	3	2	1
4	授業を受けて、科目に対する興味・関心が一層深まった。	4	3	2	1
5	授業を受けて、学力の向上を実感している。	4	3	2	1

■授業評価項目（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

評価軸	番	評価項目	評価			
生徒理解	1	先生の授業の難易度や進度は、生徒の状況に合わせたものになっている。	4	3	2	1
	2	先生は、机間巡視をするなど、生徒の理解度や学習意欲を把握しようとしている。	4	3	2	1
授業計画	3	先生は、授業のはじめに、授業の目標やねらいを明確にしている。	4	3	2	1
	4	先生は、評価方法を示すとともに、生徒の様々な面を適切に評価している。	4	3	2	1
教材活用	5	先生は、教科書のほか理解に役立つプリントや補助教材を効果的に活用している。	4	3	2	1
	6	先生は、使用する教材について深く理解しており、生徒の質問にも的確に答える。	4	3	2	1
授業展開	7	先生は、大きな声で分かりやすいことばを使って、説明したり質問したりする。	4	3	2	1
	8	先生の板書は、字も大きくていねいで、内容も整理されており分かりやすい。	4	3	2	1
授業分析	9	先生は、教材研究に努めるなど、生徒に分かる授業をしようという、熱意や意欲をもっている。	4	3	2	1
	10	先生は、授業に対する生徒の意見や要望を取り入れるなど、常によりよい授業を行うことに努めている。	4	3	2	1

■この授業の「良い点」と「改善してほしい点」を記入してください。

[良い点]	[改善してほしい点]
-------	------------

【生徒による授業評価規準表例（実技科目）】

次に示す授業評価規準表は、授業者本人が個別の授業の中で実施する形態を想定し、実技科目の共通項目の参考例として作成したものである。これらの項目に教科・科目や授業者による独自の評価項目を追加することが可能である。

■自己評価項目（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

番	評価項目	評価			
1	進んで実習に取り組むなど、授業に積極的に参加している。	4	3	2	1
2	クラス全体が授業に対して前向きに取り組んでいる。	4	3	2	1
3	授業を受けて、科目（種目）に対する興味・関心が一層深まった。	4	3	2	1
4	授業を受けて、技術・技能の向上を実感している。	4	3	2	1

■授業評価項目（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

評価軸	番	評価項目	評価			
生徒理解	1	先生の授業の進め方は、生徒の状況に合わせたものになっている。	4	3	2	1
	2	先生は、各生徒の取組みの状況を把握し、安全の確保に努めている。	4	3	2	1
授業計画	3	先生は、毎回授業のはじめに、授業内容や実習手順を示すとともに、授業の目標を明確にしている。	4	3	2	1
	4	先生は、評価方法を示すとともに、生徒の様々な面を適切に評価している。	4	3	2	1
教材活用	5	先生が与える教材や課題の分量は、技能を向上させるのに適切である。	4	3	2	1
	6	先生は、与えた教材や課題について深く理解しており、必要に応じて手本を示してくれる。	4	3	2	1
授業展開	7	先生は、大きな声で分かりやすいことばを使って、説明する。	4	3	2	1
	8	先生の指示は的確であり、前向きに授業に取り組むことができる。	4	3	2	1
授業分析	9	先生は、授業準備に努めるなど、生徒が興味をもてる授業をしようという熱意や意欲をもっている。	4	3	2	1
	10	先生は、授業に対する生徒の意見や要望を取り入れるなど、常によりよい授業を行うことに努めている。	4	3	2	1

■この授業の「良い点」と「改善してほしい点」を記入してください。

[良い点]	[改善してほしい点]
-------	------------

【生徒による授業評価規準表例（講義形式・一覧形式）】

次に示す授業評価規準表は、クラス担任がLHR等で実施する形態を想定し、講義形式の共通項目の参考例として作成したものである。なお、生徒の率直な意見を聞くために、表の中に自由記述欄を設けることも可能である。

■自己評価項目

番	評価項目
1	家庭でも予習や復習の時間をとっている。
2	授業中は集中して先生の話の聞き、学習に取り組んでいる。
3	クラス全体が授業に対して前向きに取り組んでいる。
4	授業を受けて、科目に対する興味・関心が一層深まった。
5	授業を受けて、学力の向上を実感している。

■授業評価項目

評価軸	番	評価項目
生徒理解	1	授業の難易度や進度は、生徒の状況に合わせたものになっている。
	2	机間巡視をするなど、生徒の理解度や学習意欲を把握しようとしている。
授業計画	3	毎回授業のはじめに、授業の目標やねらいを明確にしている。
	4	評価方法を示すとともに、生徒の様々な面を適切に評価している。
教材活用	5	教科書のほか理解に役立つプリントや補助教材を効果的に活用している。
	6	使用する教材について深く理解しており、生徒の質問にも的確に答える。
授業展開	7	大きな声で分かりやすいことばを使って、説明したり質問したりする。
	8	板書は、字も大きくていねいで、内容も整理されており分かりやすい。
授業分析	9	教材研究に努めるなど、生徒に分かる授業をしようという、熱意や意欲をもっている。
	10	授業に対する生徒の意見や要望を取り入れるなど、常によりよい授業を行うことに努めている。

■回答様式例（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

科目	担当教員	自己評価項目					授業評価項目											
		1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10		
国語(現文)																		
国語(古典)																		
地理A																		
現代社会																		
数学I																		
数学A																		
・・・																		

(4) 授業評価結果の集計と分析

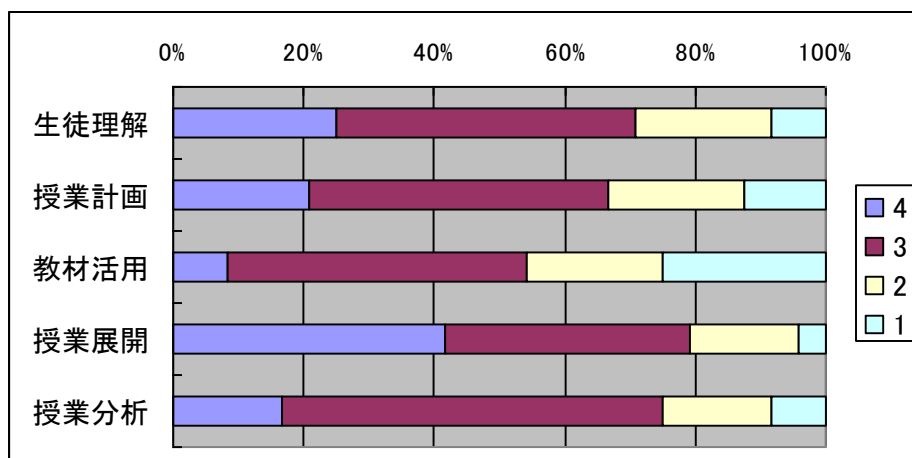
授業評価結果の集計にあたっては、効率的に集計するという観点から、授業者本人が個別の授業で授業評価を実施する場合、クラス担任がLHRなどの時間にまとめて全教科の授業評価を実施する場合のいずれにおいても、「授業評価委員会」が生徒からの回答を回収し、全教員分まとめて集計・分析した上で、その結果を授業者本人及び担任や各教科などに示すことが望まれる。

その際、ネットワークの活用やマークカードリーダーの使用、普通紙に印刷したマークシートをドキュメントスキャナーで読み取るシステムを使用するなど、効率的な集計に向けた取組計画が必要となる。

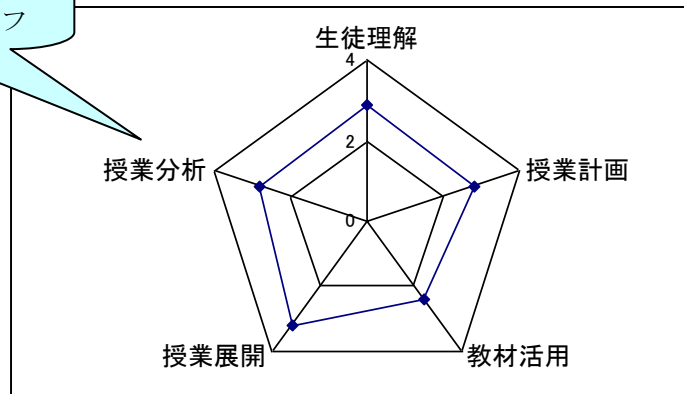
なお、「授業評価委員会」は、評価結果を集計・分析するにあたり、以下の点を踏まえる必要がある。

- ▶ 本ガイドラインの授業評価規準表例では、評価軸例と評価項目例を示している。評価結果を集計する際には、各評価項目別だけでなく、評価軸単位でも集計して、多面的な授業検証を進めることが望ましい。
- ▶ 4段階もしくは5段階で示された評価結果を評価軸別に数値化したり、レーダーチャートグラフ化したりすることは、評価軸ごとの分析を行う場合に有効である。
- ▶ 年2回授業評価を実施した場合には、その変化を数値化することで、授業改善の状況や目標達成度を確認することができる。
- ▶ 自由記述は定性的なデータであるが、類似の意見がどの程度あったのかを量的に示すことにより定量的に分析することが可能になる。

【評価結果のグラフ化例】 * 5つの評価軸に基づくグラフ例



5つの観点に基づく
レーダーチャートグラフ



(5) 評価結果の課題分析と改善方策の検討

評価結果を授業改善につなげるには、教員が自身の授業の課題を分析・整理した上で、速やかに改善計画を立てることが必要である。そのため、「授業評価委員会」から示された集計・分析結果を踏まえ、各教員が、明らかになった授業の課題や改善方策を自己評価報告書（下例参照）に取りまとめるなど、具体的な取組みを実施することが求められる。

【自己評価報告書例】

評価軸	評価結果 (数値)	評価結果から明らかになった課題	課題に対する改善方策
生徒理解			
授業計画			
教材活用			
授業展開			
授業分析			
【授業評価を実施しての感想】			
【授業改善に向けた課題】			

3 研究授業における授業評価の実施

(1) 研究授業とは

研究授業とは、授業の質の向上を目的とし、よりよい授業のあり方を求めて研究的に行う授業をいう。一般に、研究授業においては、同僚教員、他の学校の教員、学識者などが参観し、授業後の研究協議においては、明らかになった課題を踏まえ、感想・意見の交換、指導助言等、その改善策についての協議が行われる。

(2) 研究授業で期待される効果

研究授業を行うことは、授業者のみならず参観者にとっても、自らの授業実践を振り返る機会となり、授業を前向きに改善しようとする意識の向上につながる。授業者が他の教員から得る授業に関するアドバイスは授業改善にとって重要な要素になる。

また、参観者にとっては、他の教員の授業を観ることで授業の進め方や指導技術などを自ら学ぶことができる。さらに、研究授業は、先輩教員が若手教員に指導ノウハウを伝達するための貴重な場ともなる。

そして、研究協議において意見を交換することは、教員間のコミュニケーションを図るとともに、互いの信頼構築や人間関係づくりにも役立つ。同時に、研究協議はめざすべき授業を学校全体で共有する場としての役割も果たす。

(3) 研究授業の効果的な実施方法

授業者は、指導のねらいや評価の観点を整理した上で学習指導案を作成し、あらかじめ参観者に示しておくなど、十分な準備とそれに基づく授業計画を用意し、それに従って授業を展開することが望まれる。

また、研究授業の実施にあたっては、授業を振り返って、分析・検討を行うための資料を収集しなければならない。例えば、ビデオによる撮影、ボイスレコーダーによる録音、授業者による自己評価シート、参観者によるメモなどによる記録のほか、参観者に授業アンケートを実施することも必要である。

実施形態については、グループ、各教科、教科を超えた学年単位での研究授業のほか、学校全体で行う校内研修、他校との授業交流などさまざま考えられ、各学校の実態に合わせ計画的に実施することが大切である。また、段階的に広めていくとともに、行われた研究協議の内容を全教員が共有できるシステムづくりが重要となる。

(4) 研究協議のあり方

参観者は「授業者への批評」ではなく、その授業から「学んだこと」を述べ、多様な気づきを交換して相互に学び合うことが大切である。また、小グループごとの協議・発表という形態をとったり、研究協議のねらいと研究テーマを明確にしたり、参観者の記録メモを用いたワークショップ型の研究協議を企画したり、本音で話し合える雰囲気づくりに努めることが重要である。また、生徒から授業アンケートをとり、その結果をもとに協議を行うことも有効である。

4 公開授業における授業評価の実施

(1) 公開授業とは

公開授業とは、同僚教員、保護者、学校協議会委員、中学校教員などに授業の様子や生徒の学校生活の様子などを参観してもらうことを目的として実施する授業をいう。

(2) 公開授業で期待される効果

公開授業を実施し、保護者などの学校関係者に授業の実態などを把握、理解してもらうことは、家庭や地域とともに生徒を育てるという視点に立った「開かれた学校づくり」を進める上で重要である。また、公開授業は、保護者などの学校教育への参画意識を高めるとともに学校に対する信頼の構築につながる。さらに、参観者がいることで、授業者や生徒がほどよい緊張感をもち清新な気持ちで授業に臨むことも期待できる。

(3) 公開授業の効果的な実施方法

公開授業の実施にあたっては、参観者が参加しやすい日程や形態について工夫する必要がある。保護者を対象とした公開授業については、公開授業週間を設定するだけでなく、保護者が多数参加できる土曜日実施や他の行事と合わせて実施するなどの計画の検討が考えられる。また、学校協議会委員に対しては、事前に授業を参観してもらい、学校協議会の場で授業に関する協議を実施することなどが考えられる。

なお、公開授業の際の授業アンケート（次ページ参照）の実施にあたっては、授業者である教員に対する評価だけでなく、学習者である生徒や学習集団であるクラスを対象とした評価を加えることについても検討する必要がある。

(4) 同僚教員間による「授業公開」

授業改善を図る目的で、特に期間を設けることなく日常的に同僚教員が相互に授業を見せ合う「授業公開」を実施することも有意義である。

参観者が同一教科の教員の場合は、授業内容の検証、同一教科としての授業技術の研鑽等、専門的視点からの課題の明確化が可能である。一方、他教科の場合においても、生徒把握や基本的な授業の進め方などの観点から、互いの授業改善に向けたよい機会となる。また、担任として自分のクラスの授業を参観する場合には、自身の授業時やホームルームでは見ることのできない生徒の様子を知る機会にもなる。

なお、「授業公開」を実施する際には、たとえば、授業の進行や発問の工夫など、授業者がその授業で見てもらいたいポイントをあらかじめ示しておき、授業者、参観者が互いに明確な評価の観点と課題意識をもって授業参観に臨むことが重要である。

同僚教員間による「授業公開」は、チームとして授業改善に取り組む連帯意識を生み出すことにおいて非常に有効であると考えられる。まずは、グループや教科、学年単位で授業を「公開」する環境づくりを始め、さらには学校全体の取組みとして広げていくことが望まれる。

【授業参観者による授業評価規準表例（講義形式）】

次に示す授業評価規準表は、研究授業や公開授業などにおいて、授業参観者が個別の授業の中で評価する形態を想定し、講義形式の共通項目の参考例として作成したものである。

■授業評価項目（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

評価軸	番	評価項目	評価			
生徒理解	1	授業の難易度や進度は、生徒の学習状況や理解度に合わせたものになっていた。	4	3	2	1
	2	先生は、机間巡視をするなど、生徒の理解度や学習意欲を把握しようとしていた。	4	3	2	1
授業計画	3	先生は、授業のねらいや目標を明確にするとともに、授業の最後に内容についての確認を行っていた。	4	3	2	1
	4	生徒の発言や発表を取り入れるなど、生徒が授業に参加できる場面があった。	4	3	2	1
教材活用	5	先生は、生徒の理解度に応じ、教科書・資料・プリント等、教材を効果的に活用していた。	4	3	2	1
	6	先生は、生徒の質問にも的確に答えるなど、使用する教材について深く理解しているようだった。	4	3	2	1
授業展開	7	先生は、生徒の理解を助けるように、発問や指示を適切に行っていた。	4	3	2	1
	8	先生は、大きな声で分かりやすいことばを使って、説明したり質問したりしていた。	4	3	2	1
	9	字も大きくていねいで、内容も整理されており分かりやすい板書であった。	4	3	2	1
授業分析	10	生徒に分かる授業をしようという、先生の熱意や意欲が感じられた。	4	3	2	1

■学習状況（4・・・そう思う、3・・・ややそう思う、2・・・あまり思わない、1・・・思わない）

番	評価項目	評価			
1	基礎的な知識・技能の確実な定着が図れる学習活動がなされていた。	4	3	2	1
2	生徒が、学習意欲を高め、常に集中できる学習環境や雰囲気であった。	4	3	2	1
3	生徒は自ら考え、授業内容を前向きに理解しようと取り組んでいた。	4	3	2	1
4	生徒の取り組みの様子から、生徒は授業内容をおおむね理解したと考えられる。	4	3	2	1

■この授業の「良かった点」と「良くなかった点」を記入してください。

[良かった点]	[良くなかった点]
---------	-----------

V 授業評価結果の有効な活用

(1) 授業評価結果及び分析結果の公表

生徒による授業評価を実施した場合、教員は生徒に評価結果を伝えるだけでなく、その評価をどう分析し考察したかをフィードバックするとともに、生徒とともに授業を振り返る機会をもつことが有効である。

また、保護者にも授業評価実施の趣旨を伝えた上で、評価結果についての全体的な傾向や課題そして課題に対する学校としての改善方策などを示す必要がある。

さらに、学校通信やPTA新聞を用いた保護者への公表や学校協議会における委員への報告のほか、Webページを利用したより広範な公表について検討するなど、「開かれた学校づくり」の観点から、外部に対してしっかりと「説明責任」を果たす必要がある。

(2) 授業改善につなげるための取組み

評価結果を授業改善につなげるには、先に述べたとおり、評価を受けた教員が評価結果から考察される自身の授業の課題を分析、整理した上で、速やかに改善計画を立て、次回からの授業において課題を踏まえた実践を行うことが不可欠である。また、授業評価をより意義あるものにするには、評価結果を各授業者のみの課題で終わらせることなく、教科全体の課題として教科会議で議論したり、学校全体の課題として校内研修を実施したりするなど、全教員が評価結果と課題を共有し、その課題を解決するための改善方策について検討することが求められる。

授業評価は、教員間のコミュニケーションツールでもあり、授業評価を通して、教員ひとりでは解決できなかった、授業改善に向けた課題について議論することができるようになる。

教科会議や校内研修において、経験や授業スタイルの異なる教員がさまざまな観点から議論を行うことで、創意工夫に溢れたアイデアや改善方策が生みだされ、そこから教員間の信頼関係が深まることも期待できる。そして、その議論で出された意見や改善方策を、今後のシラバス作成や次年度の学校教育計画に反映させることが、さらなる授業改善につながるのである。

VI 「授業評価」実施に関するQ&A

Q 1 授業評価の目的は何ですか。

- 授業評価は、教員が自らの授業を多様な観点から検証することで、授業改善と授業の質の向上を図り、生徒にとってより「魅力的な授業」「わかる授業」を実現することを目的として行うものです。
- 授業評価は、教員の人格や人物を評価するものではありません。

Q 2 授業評価について、国が示すガイドラインはありますか。

- 授業評価については、国が示すガイドラインのようなものはありません。
- 各都道府県が独自にガイドラインを作成するなど、授業評価の取組みを進めています。

Q 3 なぜ、生徒による授業評価が必要なのですか。

- 授業内容の難易や授業の進度、教材の活用方法や学習環境など、授業を受ける側の生徒でないと気づかない側面は多くあります。また、その授業にどのような印象を持ったかということが、生徒の動機付けや学習態度に影響を与えることが多いとも考えられ、生徒から広く意見を聞くことは不可欠です。
- 生徒と授業等を通してコミュニケーションをはかり、生徒観察を行うことは重要ですが、すべての生徒の意見を把握するのは困難であり、授業アンケートという形式で生徒から授業に対する意見や要望を集めることは有効であると考えています。

Q 4 授業評価を実施することで、授業は改善するのですか。

- 授業評価は、授業のすぐれた点や課題などを明確にするためのものであり、実施して直ちに授業が改善されるものではありません。各教員が、授業改善に向けた強い意識を持ち、明らかになった課題を解決するための計画目標を立て、継続的に取り組む必要があります。
- また、各教員の取組みで終わらせるのではなく、学校全体として、全教員が一致して取り組むことが重要です。全教員が、教科会議や校内研修において、評価結果及び分析された課題を共有し、その課題を解決するための改善方策について検討することが大切です。
- さらに、授業評価は、教員が自らの改善の努力の成果を検証する機会でもあります。自らの取組みが一定の成果を得たという達成感が、さらなる授業改善に対する意欲向上につながると考えています。

Q 5 学校はどのような取組みをすればよいのですか。

- 授業改善と授業の質の向上には、評価結果から明らかになった課題を全教員が共有し、改善方策及び新たな目標設定について議論するなど、学校全体として組織的に授業改善に取り組むことが重要です。

○以下の3点については、各学校は必ず取り組むものとします。

- ▶ 授業改善までの流れを明確にするためのPDCAサイクルに位置づけた年間評価計画を立てる。
- ▶ 授業評価規準表を用いた生徒による授業アンケートを実施し、活用する。
- ▶ 学校としての授業評価の取組みについて、その成果（授業が改善された事例など）と課題（取組みを進める上での問題点など）及び課題に対する改善策をまとめる。

○各学校が、授業の現状や課題を把握した上で、校内組織・目標の設定・評価手法・成果や課題の分析方法・効果的な結果公表方法・授業改善につなげる方策などを主体的に定めるべきであると考えています。

Q 6 学校教育自己診断で実施する授業評価との違いは何ですか。

○このガイドラインに示す授業評価は、各教科・科目の授業に対する評価であり、学校教育自己診断で実施している学校全体としての包括的な評価ではありません。

○教員一人ひとりが授業改善を図るためには、「個別の授業に対する評価」が不可欠となります。

Q 7 ドキュメントスキャナーを利用した集計処理システムについて教えてください。

○普通紙に印刷したマークシートをドキュメントスキャナーで読み取るシステムには、大阪府情報教育研究会が作成したソフト「GR」や慶應義塾大学と宮城県教育委員会が作成したソフト「SQS」などがあります。

○詳細は、大阪府高等学校情報教育研究会 (<http://www.osakajoho.net/main/>) のGR専用ページ（登録必要）、SQSホームページ (<http://sqs-xml.sourceforge.jp/>) を参照してください。

Q 8 授業評価の結果は、校長への提出が義務付けられるのですか。

○学校全体で組織的に授業改善に取り組むという観点から、校長が評価結果を把握することは重要であると考えています。

○評価結果及びそこから明らかになった課題と改善策は「授業評価委員会（仮称）」等が集約するなど、学校全体で取り組む方策を検討してください。

Q 9 授業評価の取組状況について、教育委員会に報告する必要はありますか。

○実施方法や実施内容、さらに実施の成果や課題など、授業評価に関する報告書を府教育委員会に提出していただくことを予定しています。

○教員個々の集計結果等を求めることはありませんが、集計結果の概要、年間評価計画、校内研修の概要、授業評価規準表など、各学校が作成した資料についても添付していただく予定です。

Ⅶ おわりに

授業評価の実施により、最も期待される効果は教員の授業改善意識の顕在化である。授業評価そのものは、授業の質の向上を達成するための手段であり、授業評価を実施して直ちに授業が改善されるものではない。しかし、評価結果を見て、他の項目よりも低いところがあればそれが改善課題であると意識するなど、評価結果が授業改善の明確な指針となる。たとえば、「声が小さい」、「授業の進度が生徒の実態に合っていない」などの課題が判明すれば、それが明日の授業の改善課題となるのである。

しかし、「声を大きくしよう」と自覚して改善される場合もあるが、「分かっているが、どう改善すればいいのかわからない」という場合がある。そのような状況の中では、他者からの客観的な視点やアドバイスがきわめて有効になってくる。

授業の改善は教員一人ひとりの努力だけで達成できるものではない。教員の努力をサポートする体制を整備することが学校に求められている。学校全体で授業改善を試みることができれば、多様な観点から個々の授業を検証することができ、めざすべき授業がより近くに見える。「はじめに」でも述べたが、各学校において、本ガイドラインを参考として授業評価の取組みを推進し充実させることで、生徒にとってより「魅力的な授業」「わかる授業」が実現されることを期待している。

最後に、本ガイドラインの作成段階において、「授業評価は授業をする先生の人物を評価するのではない。その先生の授業そのものをさまざまな側面から分析するものである。」、「授業評価の実施にあたっては、改善意欲はあるが、うまく改善に結びつけることができない教員を支援する仕組みをつくることが重要である。」など、貴重な助言をいただいた大阪教育大学森田英嗣教授には深く感謝するものである。

参 考 ・ 引 用 文 献

- 授業評価活用ハンドブック 山地弘起編著 玉川大学出版部

- 平成 16～17 年度「授業評価システム」推進事業報告集
『よりよい授業をつくるために』 大阪府教育委員会

- 第 4 回スクールリーダー・フォーラム（平成 17 年 2 月）
『授業評価の理論・政策・実践』 大阪府教育委員会・大阪教育大学合同プロジェクト

- 学校改善のためのガイドライン（平成 20 年 2 月） 大阪府教育委員会

- 生徒による授業評価を生かした授業改善を目指して（平成 16 年 1 月）
『いい授業しようよ』生徒による授業評価開発委員会報告書 東京都教育委員会

- 平成 19 年度 教育課程指導資料
『小学校・中学校 授業評価システムガイドライン』 愛媛県教育委員会

- 高知県教育委員会高等学校課 授業評価システムの実践
『検証！授業評価システム』（平成 15 年 5 月～9 月） 高知県教育委員会高等学校課

- 「授業評価」の在り方に関する研究（平成 19 年 3 月） 千葉県総合教育センター



大阪「こころの再生」府民運動
～大阪あったかプロジェクト～



教育委員会事務局教育振興室 平成 22 年 3 月発行
〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目 TEL06(6941)0351
ホームページアドレス <http://www.pref.osaka.lg.jp/kyoisomu/data/demand.html>
電子メール kyoikushinko-g20@sbox.pref.osaka.lg.jp